



六花

10

2022

りっかはいくかい

会者定離



山田六甲

端居して弁天さまの半跏かな
こんこんと夜は星涌きぬる清水
魂を吐出して落つ後の蝉
赤箱の牛乳石 鱒 秋 暑し
十六夜の山が年寄る 福知山
仰ぐたび月まんまるになつて来し
二ノ谷の月白にたれ来て遊ぶ
文机に無花果の乳匂ひぬる
メロン出てティファニー色の病者食
山繭や根の国に来て俳句詠む

鳥海山

伊勢育ち二見に叶ふ秋の潮
大雨の中なる郡上踊かな
時の日の砂一粒の秒落つる
砦にも弱点はあり十三夜
せせらぎの音に愛宕の紅葉づるる
新米をかばたに笹旅で回しとぐ
芒山風になびくも会者定離
泣面に秋の蚊痒い痛い痛い

近江高島

延川筆子「逆打ち」連載を祝して

逆打ちに見えぬもの見え後の月
彼岸花咲くぞ咲くぞと咲きにけり
けふの雨昨日の名残り彼岸花

初蟬や瀬戸一望の崗の上

善野 行

はつぜみやせといちぼうのおかのうえ

銭湯のお釣りを足してかき氷 升田ヤス子

せんとうのおつりをたしてかきこおり

たとえば「遠山に日の当たりたる枯野かな 虚子」のように俳句は景色の大きな写生句に普遍性がある善野行の初蟬を選んだ。ヤス子の句は夏の庶民の楽しみを生き生きと描いている。かき氷を食べるといふ庶民の響きも心地よい。また二句とも句の説明の必要がないのも強み。俳句はもともと「口誦の文学」と誰かが言った。戦国時代は戦場で言葉の掛け合いをしていたらしい、つまり書かなくても理解でき、憶えられる句ということになる。夢風撰は一句を原則としているが今月は敢えて二句を選んだ。

六甲

雪嶺抄

合歓の花 ◎ 笹村 政子

花合歓や雨の岬の明るくて

みちのくの溪に目覚むる合歓の花

初蟬の雨後の晴間を鳴きはじむ

早発ちの鞍馬の宿や蟬しぐれ

ざりがにに俄か仕立ての糸垂らす

白日傘すこし回して振り返る

朝ぐもり母の素謡はじまれり

かき氷孫の手紙の大人びて

虻立たば亡き子呼びたくなりけり

吊忍ひとり暮しも佳しとせむ

みちのくの溪に目覚むる合歓の花

みちのくのたににめざむるねむのはない作者の人は合歓の花が大好き。色合いや形状が優しい作者の手柄に通うのだろう。もちろん芭蕉の詠んだ合歓の花に西施を重ねているのと同じ気持ちではないと思うが、感覚的に政子自身に合致するものが潜んでいるにちがいない。この句は「みちのくの溪」が効果を出して読者の想像を深め「目覚め」が「眠り」に呼応した言葉で挨拶。私もみちのくの旅を五十昭夫妻としたが、今もその残照がある。同時作「ざりがに」「白日傘」「かき氷」「虻」の作品などにも感銘。

大花火 ◎ 志方 章子

百度石ぼつねんと立つ夏落葉
 入道雲大きなげんこ振りあぐる
 嗽して天井の蠅見つけたり
 大花火寢床の中に聞いてをり
 初蟬の一声のみに終はりけり
 茄子を漬くこれが幸せならむかな
 蚊を打つて勝ち誇りある女かな
 かきつばた清少納言の名を持ちぬ
 孫の分一口もらふかき氷
 夫と会ふことの叶はず星月夜

大花火寢床の中に聞いてをり

おおはなびねどこのなかにきいており
 打ち上げ花火の音を寢床で一人わびしく聞いている
 よ、と夫の亡くなったひとり寝の哀しさ寂しさを客観的に表現できた。夫が亡くなってから長らく孤独感に苛まれてきた地獄から抜け出しそうになってきた。その孤独感は何年経ようとも解消できるものではないが、それを俳句にぶつけて来たからこそ孤独が和らいできたのだろう。これから先は心底俳句に遊べる準備が整ってきたといえる。「蚊を打つて」の句も自らを客観的に詠んだのかも少し面白。夢風撰候補。ちなみに「蚊を打つて夜は夫に寄る豹つかひ 橋詰沙尋」という句がある。

はまなす抄

かき氷 ◎ 升田ヤス子

銭湯のお釣りを足してかき氷
 かき氷頭痛知らずの頭痛かな
 向日葵の迷路や頬の痒くなり
 山雀やひまはりの種撒きあれば
 掌にあたるここぞ清水の湧くところ
 立葵壊さるる家の庭の隅

銭湯のお釣りを足してかき氷

くねりつつつ瀬に乗り上げて梅雨総
 麗人は俳人らしや木下闇
 夏料理つるむらさきの花芽添へ
 形代の姿うるはしわが名書く

せんとうのおつりをたしてかきごおり

ヤス子の技巧を凝らさない名句が生まれた。いかにも庶民の光景が、生き生きと描かれていて俳句は引き算の文芸で、銭湯に行ったことのない人もこの句を味わえる名句である。釣銭を足せば買える値段もうかがえる。経験であろうが、そのような庶民の生活の一部を捉えていて見事。「神田川」を彷彿とさせる俳句で迫る。夢風撰。

水田に ◎ 善野 行

苗太る水田に空はかき消えて
夕端居嬰兒去んで乳くさき家
雨の日に逢ふ約束の合歡の花
みるからにあぢさみは水欲しげなる
桃色も白もあえかや未草
梔子の破顔なる香をまき散らす
子と父と汀に構へ捕中綱
咲きてこそアガパンサスの丈すがし
耳鳴りののち初蟬となりにけり
初蟬や瀬戸一望の崗の上

苗太る水田に空はかき消えて

なえふとるみずたにそらはかききえて
植えたばかりの水田に苗が根付き始めて太り、植えたばかりの、空を写していた水かがみも苗が水面を覆いつくすようになった。その状態はもう空を写さない。空はかき消えたが、いよいよ稲は成長を早めて実りへ急ぐ。農家にとつては頼もしく早く実りの秋を待つばかり。途中何かと手がかかるが、それは実りへの手間で難儀に思うことはない。夏のお湯のような田に入り田草取る地獄のような作業も厭わない気持ち強い。美しい青空と引き換えに実りは近づく。初蟬の句は夢風撰。

別府抄

稲美の風 ◎ 廣畑 育子

時鳥声大池を駆け抜けけり
健脚の背を追ひ合歡の花を見に
蚊帳吊草心引き留む術のなし
稲美野の風はさみどり涼しめり
青鷺の頸くねらせる夕間暮れ
菩提樹の花屑落とし夏燕
白南風や両手広げて寝まる子よ
車前草の花が蹴りたる靴の先
初蟬や汲み上げポンプの音続く
雷の夜や肩を大きく深呼吸

稲美野の風はさみどり涼しめり

いなみのかぜはさみどりすずしめり
俳句には審美眼が必要。掲句は風の色を感じ審美眼を發揮して、「さみどり色の風」と捉えた。

さみどり色もさながら、植田を吹きわたってくる風はことのほか涼しさを感じる、という。育子のように稲美野を気持ちよく歩いて涼しい句を案じながら歩いて見たものは靴だが、オオバコの花が靴を蹴ったと主客を転倒させているのも文芸の力。稲美の風は夢風撰候補。

端居 ◎ 永田万年青

かき氷匙を銜へて雨逃がる
 夕立や濡れて帰らば雨上がり
 白南風や数多のタンカー西に行く
 梅雨晴間心軽くし眩しかり
 炎昼の昼行燈となりにけり
 まつすぐに開閉したる蓮の花
 片蔭をランナーの靴正確に
 海沿ひを吾と雀の子の散歩
 朝刊のビニールに入る梅雨最中
 端居して夕風に目をつむりけり

炎昼の昼行燈となりにけり

えんちゅうのひるあんどんとなりにけり
 昼行燈（ひるあんどん）というのは、慣用句の一つで、昼間に行灯（あんどん）を灯しても意味がないことから、転じて日頃からボンヤリとしている人や役に立たない人を揶揄する言葉として使われるが、殊に有名なのは大石内蔵助であるが今は知る人も少ない。万年青は暑さに弱いから気持が昼行燈になつたといふのかも。ほかに、急な雨に食べかけのかき氷の匙を銜えたままで雨宿りをしたという慌てぶりも面白い。また端居の句もなかなかよかつた。端居の句は夢風撰候補。

大夕焼 ◎ 出口 誠

午後の二時どこか控へめ蟬の声
 コロナ禍でどこへも行けぬ夏の空
 コロナ禍で外出禁止夏の空
 昼食にとても大きなきゆうり食む
 お見舞に曲がりしきゆうりもらひけり
 西日さす待合室にブレーキ音
 西日さす待合室にクラクション
 大夕焼父の乗りたる列車来る
 大夕焼「おつかれさま」と父に言ふ
 想ひ出の駅はもうなし大夕焼

大夕焼「おつかれさま」と父に言ふ

おおゆやけおつかれさまとちちのいう
 大夕焼というのは上五音にするため、おおゆやけと俳句独特の言い方。夕焼だけでもその感じはあるけれど、とくに見事に空いっばいに広がっている夕焼けをいうのだろう。その時刻に父が列車で帰ってきた。到着列車から下車してくる父を叫ぶ。「おつかれさま」と大きな声を上げ、父の声にすっかり疲れを癒される。出張旅行からか、退勤で帰宅する父かは読者の鑑賞にまかせよう。身辺に出来たことを俳句にさらりと詠むのも大事。俳句は一句勝負だからいい足りないこともあるが、誠君の場合二句を併せてみるのも方法。

竹落葉 ◎ 江見 巖

凌霄の花咲きをはる掃き終へる
持仏堂半分開けて夏木立
卯の花や子供を一人隠したる
青葉風押されて入る奥の院
竹落葉地蔵の横の欠け茶碗
月下美人作詞のできぬ夜中かな
梅花藻の立ち上がる水また低く
鎌倉の首を落とすや七変化
栗の花匂ひつつまる未決囚
梅雨明けや魚板の音の空に澄む

凌霄の花咲きをはる掃き終へる

のうぜんのはなさきおわるはきおえる
凌霄の花は蔓性で次々と咲いて散る。だから掃除に忙しい。咲き始めると毎日散って、とうか落ちて、その掃除に追われ、大変な労力がある。毎日沢山落ちるから毎日掃除を余儀なくされ、毎日毎日掃除との戦いに。やっと咲き終わって、その労力から解放されると思うとホッとす。掲句のように咲き終わるときが掃除からも解放されるのだろう。その苦勞がよく理解できる。そのほか「竹落葉」「梅花藻」「魚板」の音の句に感銘した。特に地蔵の横の欠け茶碗に風情を見る。夢風撰候補。

素麺流し ◎ 谷口 一猷

近づいて見ればみんなみん蝉は碧
素麺の流し止めにも小石置き
茄子の牛王様気取りで並びけり
天の川より堰切つて星至る

茄子の牛王様気取りで並びけり

想ひ川瀬にひと声の初河鹿
立秋てふ心落ち着く日なりけり
秋立つや清盛像のぬつと起ち
佛心に触るる言葉の涼新た
錦織纏いてをりぬ大文字
ハロウインしか想ひ浮かばぬ南瓜かな

なすのうしおおさまきどりでならびけり

茄子の牛や胡瓜の牛馬は孟蘭盆会の仏壇に飾る。あの世から霊が牛や馬で家に帰ってきてあの世への帰りにはその馬や牛に乗って帰ると信じられてい。この世へ帰ってくる時には足の速い胡瓜の馬に乗ってもらい、あの世に帰って行くときには茄子の牛に乗ってゆっくり帰って欲しいという願いが込められている。茄子に割り箸を刺して作った牛の貫禄がまるで王様気取りの貫禄があるよという句。その他「そめん流し」「立秋」「仏心に」の句にも感銘。いずれも夢風撰候補。

酷暑の断片 ◎ 田尻 りさ

薊だけ花の凧いでて梅雨明け
 幼子の矯声の中蝉時雨
 台風の上陸するか高揚感
 夏の潮福田支流を登り行く
 春月や日本列島危険満つ
 ビルの森梅雨に咽びてをりにけり
 蓮の池縄文人は生きてない
 コスモスに埋もれて歩く人のあり
 エンドロールに君の名のあり夏の宵
 なにももの断片になる酷暑かな

なにももの断片になる酷暑かな

なにもものだんぺんになるこくしよかな
 暑すぎてさまざまなのが断続的になって連続し
 ない、記憶も、予定の行動も断片のようにつながら
 がなくなった。特に記憶の断片化は暑さのせいであ
 り、理由が分かるような気がする。もちろん今日
 しなければいけないことも、途中で止めて完成にま
 で行かない。そういうことが酷暑による断片化であ
 ると嘆く。もちろん記憶にも連続性はなくなり、文
 字通り途中で切れ切れになるのだ。

自分で今何をしてたか、何をしようとしていた
 か忘れる状態であろう。「薊の句」「台風の高揚感」
 もわかるがその高揚感を物に語らせると夢風撰にな
 る。

瓜の花 ◎ 草場つくし

帰り道婆と数へる瓜の花
 宴あと蚊にも寄られて夢の中
 空蝉を拾うて胸に飾りけり
 指先の天道虫や飛びなはれ
 夏ばらの石鹸の香のしてをりぬ
 睡蓮のひよつこり覗く朝の沼
 蒲の穂の泰然自若城の中
 緞帳の上がるが如く滝のあり
 兄ちゃんに何度も取られかき氷
 ぜえぜえと駆け乗るバスや朝曇

帰り道婆と数へる瓜の花

かえりみちばあとかぞえるうりのはな
 瓜の花の数が行きと帰りに明らかに違うような気
 がして、祖母とあれこれ語りながら数えている状態。
 ということは行くときに祖母と瓜の花を数えていた
 のだろう。が、帰りには明らかに瓜の花が増えてい
 た。そのことを祖母と確かめている。こういうこと
 は盛夏にはよくある現象かもしれない。途中で瓜の
 花が増えていたので、それに興味を抱いた孫が「お
 ばあちゃん、花が増えてる」と叫んだのかもしれない。
 夏場の野菜や果物は油断がならない。一日で
 も目を離すと成長しすぎて商品価値が落ちる場合が
 あるという。その盛んな夏に起きた野菜の現象を詠
 んたのである。そのほか「宴あと」「空蝉」「天道虫」
 「石鹸の香」「緞帳の滝」などにも感銘。夢風撰候補。

螢火 ◎ 磯野青之里

神域にひびく砂利音蟬の声
 キャンパスはりモート授業蟬しぐれ
 蟬捕りや兄に倣ひし網さばき
 氷かく音のリズムや山に盛る
 髭文字の旗に飲む唾かき氷
 冷蔵庫開けて右京の推理かな
 螢火の色の变化や宵の闇
 進みゆく方が前なり見蚯蚓出づ
 田水沸く足跡すでに埋もれけり
 赤錆を吐き出し投錨夏港

螢火の色の变化や宵の闇

ほたるびのいろのへんかやよいのやみ
 螢の出る頃には空の明るさが落ちて川の辺りがほの暗くなる。その闇は螢によって闇の色が変化してくると気づいた。闇は黒一色かと思つたら、そうではなく、闇にも色が変化すると言う。言われればその通りで薄い闇から濃い闇へと少しずつ変化していくので、それを言葉で表現した。そのほか「右京の推理」は杉下右京のことか。「蚯蚓」は進みゆく方が前というのも面白い発見。「田水沸く」という暑さで田んぼの水が湯のようになるのもいずれも面白い。夢風撰候補。

蟬の声 ◎ 浜田久美子

蟬の声集め波紋となりけり
 片陰に雀なにやら啄めり
 牛蛙沼はまどろみみたりけり
 空と葉の青さに蓮の凜と咲く
 凜として淡紅の蓮開きけり
 蓮の葉に散りたる花の二三片
 蓮の色夕日の雲にうつりをり
 ほつれ毛を指で整ふ端居かな
 一陣の風の過ぎゆく端居かな
 蓮開く刹那に夢のまばたける

蟬の声集め波紋となりけり

せみのこえあつめはちんとなりけり

蟬時雨は数多の蟬が一斉に鳴き、それらは共鳴したり不協和音になったりして句の通り音の波紋となつて一面に広がりわんわんと空気に響く。沢山の蟬が同時に喚くとその鳴き声は句のとおり水面のように「波紋」となつて広がって行く。その波紋に人間は慣れながらも、すでに冷静さを失つて余計に暑さを覚えている。作者はここで波紋という言葉を見つけた。音は確かに空気の振動であり震動は確かに波紋となつて広がり、それを目に見えるような音の可視化が佳く、そこを夢風撰候補とした。